

令和8年度
第68回 全国公立学校教頭会研究大会
第59回 北海道公立学校教頭会研究大会

札幌大会 集録

全国公立学校教頭会　北海道公立学校教頭会

目　次

◇開催要項…… 1
◇基調提案…… 2
◇札幌大会の趣旨・研究協議の視点 …… 3
◇シンポジウム・記念講演 …… 4
◇シンポジウム …… 5
◇記念講演…… 6
◇札幌大会の様子…… 7
◇全国共通研究課題及び研究の視点…… 8
◇分科会提言テーマ …… 10
◇分科会指導助言者・提言者・役員一覧…… 12
◇第１A分科会 …… 14
◇第１B分科会 …… 15
◇第２分科会 …… 16
◇第３分科会 …… 17
◇第４分科会 …… 18
◇第５A分科会 …… 19
◇第５B分科会 …… 20
◇第６分科会 …… 21
◇特別Ⅰ分科会…… 22
◇特別Ⅱ分科会…… 23
◇札幌大会分科会の様子…… 24
◇札幌大会運営の様子…… 25
◇次期開催地あいさつ …… 26
◇あとがき …… 27



札幌市の花である「スズラン」、木である「ライラック」、そして鳥の「カッコウ」。街の中心に位置する「時計台」は、古くから札幌市のシンボルとして親しまれています。本マークは、これらを組み合わせてデザインされました。

また、北海道公立学校教頭会では、全道を６つのブロックに分けて研究を推進しています。マークに描かれたスズランの六つの花は、それぞれのブロックを象徴しており、それらが一つの茎でつながることで、組織の強い結束とまとまりを表現しています。

作成者：安田 仁昭
（第39代北海道公立学校教頭会会長）

年次別にみた研究大会一覧

昭和34年度	第１回	東京都	昭和51年度	第18回	愛媛県	平成５年度	第35回	新潟県	平成22年度	第52回	北海道
昭和35年度	第２回	鳥取県	昭和52年度	第19回	山梨県	平成６年度	第36回	北海道	平成23年度	第53回	和歌山県
昭和36年度	第３回	東京都	昭和53年度	第20回	北海道	平成７年度	第37回	奈良県	平成24年度	第54回	東京都
昭和37年度	第４回	静岡県	昭和54年度	第21回	兵庫県	平成８年度	第38回	山口県	平成25年度	第55回	大分県
昭和38年度	第５回	和歌山県	昭和55年度	第22回	岡山県	平成９年度	第39回	福岡県	平成26年度	第56回	秋田県
昭和39年度	第６回	熊本県	昭和56年度	第23回	鹿児島県	平成10年度	第40回	福島県	平成27年度	第57回	静岡県
昭和40年度	第７回	東京都	昭和57年度	第24回	宮城県	平成11年度	第41回	愛知県	平成28年度	第58回	徳島県
昭和41年度	第８回	宮城県	昭和58年度	第25回	三重県	平成12年度	第42回	香川県	平成29年度	第59回	埼玉県
昭和42年度	第９回	岐阜県	昭和59年度	第26回	徳島県	平成13年度	第43回	群馬県	平成30年度	第60回	北海道
昭和43年度	第10回	香川県	昭和60年度	第27回	東京都	平成14年度	第44回	北海道	令和元年度	第61回	滋賀県
昭和44年度	第11回	新潟県	昭和61年度	第28回	北海道	平成15年度	第45回	大阪府	令和２年度	第62回	岡山県
昭和45年度	第12回	北海道	昭和62年度	第29回	京都府	平成16年度	第46回	鳥取県	令和３年度	第63回	佐賀県
昭和46年度	第13回	滋賀県	昭和63年度	第30回	島根県	平成17年度	第47回	宮崎県	令和４年度	第64回	岩手県
昭和47年度	第14回	広島県	平成元年度	第31回	長崎県	平成18年度	第48回	山形県	令和５年度	第65回	石川県
昭和48年度	第15回	沖縄県	平成２年度	第32回	青森県	平成19年度	第49回	福井県	令和６年度	第66回	高知県
昭和49年度	第16回	岩手県	平成３年度	第33回	富山県	平成20年度	第50回	愛媛県	令和７年度	第67回	茨城県
昭和50年度	第17回	石川県	平成４年度	第34回	高知県	平成21年度	第51回	千葉県	令和８年度	第68回	北海道



【開催要項】

1　主催

全国公立学校教頭会　北海道公立学校教頭会

2　主管

札幌市小学校教頭会　札幌市中学校教頭会

3　後援

文部科学省　全国都道府県教育長協議会　北海道　札幌市
北海道教育委員会　札幌市教育委員会　北海道町村教育委員会連合会
北海道都市教育委員会連絡協議会　全国連合小学校長会
全日本中学校長会　全国へき地教育研究連盟　北海道小学校長会
北海道中学校長会　札幌市小学校長会　札幌市中学校長会
公益社団法人日本PTA全国協議会　北海道PTA連合会　札幌市PTA協議会
公益社団法人日本教育会　公益財団法人日本教育公務員弘済会北海道支部　（順不同）

4　研究主題

『未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり』（全国統一研究主題 第14期 1年次）
主題に迫る視点「持続可能な社会の創り手の育成」「ウェルビーイングの向上」

サブテーマ

「夢と志をもち 未来をしなやかに歩み続ける力を育む 活力ある学校づくりの推進」

5　開催期日

令和8年7月30日（木）・31日（金）

6　開催地

北海道札幌市

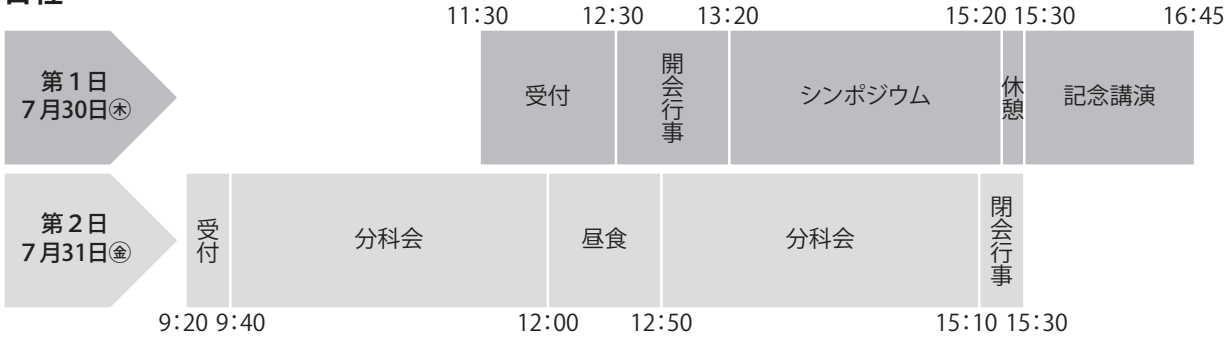
7　会場（2日間とも同一会場）

全体会場・分科会会場：札幌コンベンションセンター

8　開催方法

参集型・オンライン型を併用したハイブリッド大会

9　日程





基調提案

未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくりをめざして

全国公立学校教頭会　研究部

全国公立学校教頭会は、会員の資質を高めるための研修を推進し、教育の発展向上に寄与するとともに、会員の地位向上を図ることを目的に、昭和36年の改称以来60余年にわたり運営されてきた政策提言能力を備えた職能研修団体です。

全国公立学校教頭会の実践研究には、次の３つの基本方針があります。１）学校教育の課題の解決に努めること、２）副校長・教頭の職務内容や職務機能を追究すること、３）研究成果を政策提言活動に生かすことです。これは、副校長・教頭として自身の持ち場で学校長の補佐役として課題の解決に努めながら、その過程において、個別具体的な課題をより研究的かつ実践的に追究し、自身の資質・能力の向上や職務機能の充実を図っていくことを指します。全国各地で実践されている研究の積み重ねをより実証的に、科学的に練り上げ、エビデンスとして政策提言に生かすことも求めています。その実現のため、全国公立学校教頭会では、期ごとに、全国統一研究主題を設定し、実践研究を推進してきました。

現在、IoTで人とモノがつながり、様々な知識や情報が共有されるSociety5.0社会を迎えています。生成AI等の情報技術を用いた新たな価値の創造や社会問題や困難の解決への取組が始まる一方で、劇的に進展する少子・高齢社会への対応など、解決困難な社会課題もますますクローズアップされています。

このような状況の中で、第４期教育振興計画では､「持続可能な社会の創り手の育成」及び「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」及びこれらの相互循環的な実現に向けた取組を充実させることがコンセプトとして示されており、学習指導要領で示された「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」との理念もこの方向性と軌を一にするものです。学校と社会が目指す教育の姿を共有し、持続可能な社会の創り手となるために必要な資質・能力を育成する、「社会に開かれた教育課程」を実現することが、私たち副校長・教頭にも求められています。

全公教では、動向を見極めながら、実践的な研究を継続的に推進してきました。上述の研究の基本方針を踏まえ、教育課題を「教育課程」「子供の発達」「教育環境整備」「組織・運営」「教職員専門性」「副校長・教頭の職務内容や職務機能」の６つの研究課題に整理し、「継続性（continuity）」、「協働性（collaboration）」、「関与性（commitment）」の３つのCに焦点を当てて実践的研究を進めています。全国大会のみならず各地区ブロック、都道府県、郡市区町村教頭会・副校長会でも、全国統一研究主題に基づき研究活動を進めています。

第14期全国統一研究主題は、「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり」、主題に迫る視点は「持続可能な社会の創り手の育成」「ウェルビーイングの向上」です。本年度はその１年次に当たります。

今回の札幌大会では、「夢と志をもち 未来をしなやかに歩み続ける力を育む 活力ある学校づくりの推進」がサブテーマとして設定されました。時計台の鐘がなる自然と開拓精神あふれる北海道・札幌の地において研究大会が開催され、全公教が目指す「学校づくり」への熱心な学びを皆様と共に実現できることを期待しております。

最後に、この研究大会に向け、長い時間と多大な労力をかけて準備された札幌大会実行委員長をはじめ実行委員会の皆様のご尽力に敬意を表しますとともに、単位教頭会・副校長会、関係諸団体の皆様、所属の校長先生及び教職員等多数の皆様のご理解とご協力があって第68回札幌大会を開催することができますことに心より感謝を申し上げます。



サブテーマ設定の理由及び研究協議の視点について

1　大会主題「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり」
（第14期　全国統一研究主題　1年次）
＜主題に迫る視点＞：持続可能な社会の創り手の育成・ウェルビーイングの向上
「サブテーマ」：夢と志をもち 未来をしなやかに歩み続ける力を育む 活力ある学校づくりの推進

2　札幌大会のサブテーマ

第14期1年次に当たる札幌大会は、前年度の茨城大会の研究の成果と、第14期全国統一研究主題及び主題に迫る視点の趣旨を踏まえて、サブテーマを「夢と志をもち 未来をしなやかに歩み続ける力を育む 活力ある学校づくりの推進」と設定した。

現代は予測が困難な時代であり、「ＶＵＣＡ」の時代（変動性、不確実性、複雑性、曖昧性）であると言われている。こうした中、第３期の教育振興基本計画期間中に発生した新型コロナウイルス感染症の感染拡大やロシアのウクライナ侵攻による国際情勢の不安定化は、まさに予測困難な時代を象徴する事態であった。このような危機に対応する強靱さを備えた社会をいかに構築していくかがこれからの重要な課題である。

こうした社会の実現に向けて、一人一人がよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、「持続可能な社会の創り手」になることを目指す考え方が重要になる。また、ウェルビーイングが実現される社会は、子供から大人まで一人一人が担い手となって創っていくものである。社会全体のウェルビーイングの実現に向けては、個人のウェルビーイングが様々な場において高まり、組織のウェルビーイングも高い状態が実現され、そうした組織が社会全体に増えていくことが必要となる。子供たち一人一人が幸福や生きがいを感じられる学びを保護者や地域の人々とともにつくっていくことで、学校に携わる人々のウェルビーイングが高まり、その広がりが一人一人の子供や地域を支え、更には世代を超えて巡回していくという在り方が求められる。

北海道においても、学力や体力の低下、地域格差の拡大、道徳的な課題、心の問題、更には教職員の服務規律意識や資質･能力の向上、働き方改革の着実な実行、教職員のメンタルヘルスに関わるライフケアの課題等が山積している。

以上のことを踏まえ、サブテーマを「夢と志をもち 未来をしなやかに歩み続ける力を育む 活力ある学校づくりの推進」と設定し、今求められている学校教育の在り方とその実現に向けての副校長・教頭の関与の在り方を探っていく。

3　札幌大会研究協議の視点

（1）「未来を切り拓く力」の捉え

「未来を切り拓く力」を「夢と志をもち 未来をしなやかに歩み続ける力」と捉える。

①切り拓く力を生かしながら、他者と協働し豊かに生き続ける力や強固と柔軟を兼ね備えた強靱な対応力

身に付けた切り拓く力を生かしながら、自分の望む未来に向け、豊かに歩み続けたり、他者とともに未来を創造したりする行動力を育む。また、自分の夢の実現に向け、志を立てて歩み続けるためには、幾つもの困難を乗り越える強さが必要である。強固な身体や精神力で困難を撥ね除ける強さが必要であるとともに、予測が立たない事態や急激に変化する状況に柔軟に対応するしなやかな力も必要となる。時には正面からぶつかり、時にはいなしながら、困難に対応する強靱な資質・能力を育む。

②ウェルビーイングの実現に向け、一人一人が持続可能な社会の創り手

一人一人が自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら社会的変化を乗り越えられ、「持続可能な社会の創り手」になることを目指すことが重要になる。未来に向けて自らが社会の創り手となり、課題解決を通じて持続可能な社会を維持・発展させていく力を育む。

（2）「魅力ある学校づくり」の捉え

「魅力ある学校づくり」を「活力ある学校づくり」と捉える。

○魅力ある開かれた学校づくり

副校長・教頭が生き生きとリーダーシップを発揮し、教職員の経営参画意識や達成感、自信を高め、研究や研修による資質・能力の向上を通して、「学校力」「教師力」を育てる。また、教職員の心身の健康に配慮し、適正な勤務管理と業務改善を通して、持続可能な学校経営の維持と充実を図る。様々な工夫や関わりを通して、『教師にとって「働きたい」、子供たちにとって「通いたい」、保護者・地域にとって「共生したい」、魅力ある開かれた学校づくり』に取り組む。

これらのことを達成していくために、私たち副校長・教頭が、学校現場においてどのようにリーダーシップを発揮していくか。３Ｃ「継続性」「協働性」「関与性」に焦点を当て、実践研究を通して有効な具体策を明確にしていきたい。



【シンポジウム・記念講演】

■シンポジウム《7月30日（木） 13：20～15：20》

コーディネーター

札幌市立北園小学校
校長
渋谷 一典 氏



平成２年から札幌市立の小学校で４校勤務後、札幌市教育委員会指導主事、文部科学省初等中等教育局教育課程課・教科調査官、国立教育政策研究所教育課程研究センター・教育課程調査官を歴任。北海道教育大学教職大学院札幌校教授を経て、現職。専門は生活科教育、総合的な学習の時間および総合的な探究の時間に関する学習指導、教育課程、幼小接続・連携、カリキュラムマネジメントなど。

【子供の頃の夢】
ウルトラマン、物知りはかせ

シンポジスト



文部科学省国立教育政策研究所
教育政策・評価研究部長
藤原 文雄 氏

博士（教育学）。民間企業、国立大学勤務を経て、2010年から国立教育政策研究所初等中等教育研究部総括研究官、2020年より初等中等教育研究部長、2023年より教育政策・評価研究部長併任。2025年から、教育政策・評価研究部長に配置換え。専門は教育行政学。

【ストレス解消法】 映画を見てよく寝ること



株式会社MammyPro
代表取締役
阿部 夕子 氏

平成18年７月株式会社MammyPro設立。同年９月北海道育児情報サイト「ママNavi」を立ち上げ、札幌市内30代を中心に子育て中の主婦が登録するビックサイトに成長。平成24年～令和６年札幌市教育委員等、札幌市の教育、市民の未来を創造する企画に多角的に参画。札幌市在住１女の母親。

【趣味】 ゴルフ、サウナ、カフェ巡りや食べ歩き



札幌市立藤野中学校
校長
工藤 真嗣 氏

平成３年から札幌市立の中学校で社会科教諭として２校勤務の後、札幌市教育委員会指導主事、札幌市教育委員会研修担当課長、教育相談担当課長等を歴任。令和４年、北海道で唯一の公立の夜間中学校、「札幌市立星友館中学校」の初代校長として着任。

【休日の過ごし方】 犬の散歩

■記念講演《7月30日（木） 15：30～16：45》

「子どもたちに必要な創造性とは何か」～音楽プロデューサーの現場から見た学びの本質～



作曲家・音楽プロデューサー
蔦谷 好位置 氏

1976年生まれ。北海道札幌市出身。幼少の頃よりピアノ・パソコンに触れ、特にクラシックに深い興味を持ち独学で学ぶ。その後幅広いジャンルを研究・演奏し造詣を深めた。2000年、バンド CANNABISとしてメジャーデビューし、その後2004年agehaspringsに加入。これまで、YUKI、ゆず、エレファントカシマシ、稲葉浩志、米津玄師、JUJU、back number、SEKAI NO OWARI、Official髭男dism、milet など数多くのアーティストへ楽曲提供やプロデュース、アレンジを行う。また近年では、大ヒット映画『ウィキッド ふたりの魔女』『ウィキッド 永遠の約束』『キャッツ』では日本語版吹替音楽プロデューサーを、映画『SING/シング』では音楽プロデューサーとして日本語吹替版監修を担当。2018年には自身の変名プロジェクトであるKERENMI（ケレンミ）も始動し、ドラマの劇伴や主題歌を担当するなど、ビートメイカーとしても活躍している。



シンポジウム【7月30日(木) 13：20～15：20】

【主題】夢と志をもち 未来をしなやかに歩み続ける力を育む 活力ある学校づくりの推進

テーマ１：夢と志（小さな芽をどう育むか）

【問い・導入（渋谷氏）】



職業の形が変化する現代、夢を一つに決めることだけが正解ではない。子供の「未来を明るく描く感覚」や「誰かの役に立ちたい思い（91.6%）」を夢と志の「小さな芽」と捉え、それを育む安心と出会いの場をどう作るか。

■工藤氏（学校現場）：夢の前提には「否定されない安心感」が不可欠。不登校経験者など多様な背景をもつ夜間中学（星友館中）では、現状を受け入れ困り感を吐露できる環境を整えることで、やり直しや未来を描く一歩につなげている。

■阿部氏（キャリア/地域）：子供が知る職業は30程度だが世の中には約500ある。重要なのは職業名ではなく、「興味・能力・価値観」の三つに自ら気付くこと。学校での授業（写真加工等）が「社会のデザインの仕事につながる」と伝えるような外部の視点からの発信が、夢を具体化させる。



■藤原氏（研究/政策）：夢や意味を見出す機会は特に環境的に厳しい子供にこそ必要。夢に向かって基礎へ降りていく学び（必要性を感じて学ぶ）と、選択肢を広げるために基礎を積み上げる学びの両面が重要。

テーマ２：しなやかさ（失敗と再挑戦を支える風土）

【問い・導入（渋谷氏）】

しなやかさ（レジリエンス）とは単に折れないことではなく、「迷いや失敗を次の一歩の材料に変えて選び直せること」。挑戦への肯定感が56.4%にとどまる現状をどう破り、再挑戦を支えるか。

■藤原氏：子供のウェルビーイングには「ここにいてもいい」という所属意識が不可欠。また、AI時代において生身の人間や技術との出会いを通じ、自らの人生を舵取り（エージェンシー）できるよう環境をデザインすることが教師の役割である。

■阿部氏：ヒット商品は「300分の1」の失敗の上に成り立つ。大人や教師自身が試行錯誤や失敗を見せる姿勢が、「失敗してもやり直せる」という安心感を生み、子供の挑戦心を育む。

■工藤氏：生徒の声（給食やカリキュラムの改善要望など）を学校運営協議会等で拾い上げ、実際に学校が変わる経験を作ることが、自分たちで未来を変えられるという「しなやかさ」の実感につながる。

テーマ３：副校長・教頭の立ち位置（持続可能な学校経営）

【問い・導入（渋谷氏）】

夢やしなやかさを育む営みを個々の教員の努力だけに委ねず、学校経営として持続可能にするため、副校長・教頭は声や資源をどう「つなぎ直し」展開すべきか。

■藤原氏：教頭職は教員の延長ではなく「経営・調整・教員を守る全く別の職種」。教職員が安心・成長・納得感をもてる「ウェルビーイングな環境」を作ることが教頭の固有の役割であり、そのためには校長による教頭への支援や、教頭自身の学びの時間の確保が急務である。



■阿部氏：外部企業や地域も学校と関わりたいが「連絡先や関わり方が分からない」のが実情。教頭が抱え込むのではなく、国や自治体によるマッチングの仕組み化や、双方が一歩踏み出すための役割分担の整理が必要である。

■工藤氏：現場の困り感や声を吸い上げる窓口として苦労は多いが、恐れず対話を重ね、「こう変えたい」と校長へ構造的な提案としてつなげることが、組織ぐるみの持続可能な改善を生む。

テーマ４：最終メッセージ

■藤原氏：公教育では意見の対立も起こるが、管理職は担任を一人で抱え込ませず守ること。教頭職は通過点ではなく学校経営の核心を担う専門職として頑張っていただきたい。

■阿部氏：企業も何百回の失敗の上にヒットが生まれる。教職員が安心して挑戦し、失敗も成功も積み重ねていける風土を応援している。



■工藤氏：一人で抱え込まず、声を出せない子のサインを丁寧に拾い上げながら、校長や同僚とともに前向きな対話を重ねていってほしい。

■渋谷氏：副校長・教頭は、子供と大人、学校と地域、現在と未来をつなぐ要の存在。学校での小さな一歩につながることを願っている。



記念講演【7月30日(木) 15：30〜16：45】

【演題】「子どもたちに必要な創造性とは何か」〜音楽プロデューサーの現場から見た学びの本質〜

Q　音楽プロデューサーを目指すきっかけは？

A　原体験は小学校2年生の音楽の授業。合唱の伴奏に違和感を覚え「みんな間違っている」と発言したところ、誰にも理解されず孤独を感じた。この経験から、「正しい・美しい」が伝わらないことがあると知り、相手に分かる言葉や別の角度から伝えることを大切にするようになった。

Q　音楽の道へ進んだきっかけは？



A　幼い頃からピアノやエレクトーンを続け、小学生の頃には人の曲を聴いて「ここを変えたらもっと良くなる」と考え、アレンジしていた。音楽で生きていくことは難しいと思っていたが、大学時代、後輩から「麻雀ではなく音楽をやってください」と背中を押された。ライブ後には店長からCD制作を勧められ、作品をレコード会社等に送ったところ反響があり、「音楽でやっていけるかもしれない」と道が開けた。

Q　音楽プロデューサーとしての喜びと難しさは？

A　音楽を作り、演奏すること自体が喜び。一方で、過去の自分を超えられない、良い曲を作ろうとしても届かない、自分の癖やマンネリと向き合わなければならない難しさもある。「自分がやりたいこと」「自分が得意なこと」「相手から求められていること」の三つが重なる場所を探し続けることが重要だと考えている。

Q　異なる職種の人と協働するときに大切なことは？

A　相手の目線に立ち、分かりやすく伝えること。自分が良いと思う理由を言語化し、必要なら複数の案を示す。アレンジでは4パターンほど実際に作り、比較しながら最良の形を探すこともある。異業種の相手には、分からないことを積極的に質問し、相手の専門性を尊重する。質問することで「あなたに興味がある」「真剣に向き合っている」ということも伝わり、信頼関係につながる。



Q　人材を育て、才能を輝かせるために必要なことは？

A　才能を最初からもっている人が多いが、輝かせ方を知らないことがある。だからこそ、年齢や立場に関係なくリスペクトをもち、本人が「どうしたいのか」を聞き、意見を言いやすい空気をつくることが大切。作品を作る前に徹底的に話し、違和感や希望を言える環境を整える。うまくいかなかった時も否定するのではなく、「こうすればもっと良くなる」と別の方法を提案する。

Q　才能を見極める上での失敗や学びは？

A　Official髭男dismのドラマー・松浦匡希さんについて、以前は「プロとして厳しい」と判断したことがあった。しかし、ボーカルの藤原聡さんは「4人で行く」と決め、松浦さんは努力を重ねて大きく成長した。この経験から、外部の人間が短絡的に「変えれば良くなる」と考えるのではなく、その人やチームがもつ絆・可能性を尊重することを学んだ。

Q　AI時代における「創造性」とは？

A　AIを否定する必要はなく、新しい技術を使って創作することも、その時代の創造性の一つ。ただし、これからは「何を作ったか」だけでなく「誰が作ったか」「なぜその人が作るのか」という人間そのものの価値がより重要になる。AIを使う子供を否定せず、一方で実際に描く・弾く・歌う・作るといった創作そのものの喜びも体験させてほしい。

Q　学校教育に期待すること、子供の創造性を育てるには？



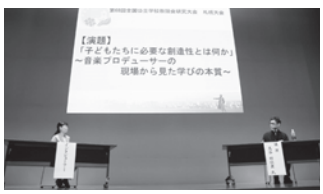
A　決められたルールや正解を全て否定する必要はないが、できるだけ多様な角度から物事を見る機会を与えてほしい。少し変わった意見や「普通ではない」考えをもつ子をおもしろがり、まず話を聞くこと。その子の考えが正解ではなくても、「その視点はおもしろい」と認めることで、孤独を防ぎ、可能性を伸ばせる。端にいる子にも大きな才能がある。

Q　特性のある人と関わる際に心掛けていることは？

A　米津玄師さんとの仕事では、彼自身の世界観を尊重しつつ、「自分ができないことも言葉で説明できる」力に驚かされた。才能がある人と向き合う時は、相手のよさを尊敬し、互いに学び合い、良い部分を「盗み合って」高めていくことが大切。また、エレファントカシマシの宮本浩次さんからは、仲間だからこそ作品への思いを丁寧に説明する姿勢を学んだ。

Q　教頭・副校長へのメッセージは？

A　自身も小学生時代、いたずらをしてしまった際に、叱るだけではなく笑顔で受け止めてくれた教頭先生の思い出がある。「変なやつもこうやって大人になる」。子供たちを大きな心で、優しく見守ってほしい。これから校長となる皆さんには、より良い学校をつくり、子供たちと教職員一人一人の可能性を伸ばしてほしい。



※講演内容をもとに、インタビューの質問と回答が対応するよう整理・要約したものです。



札幌大会の様子








第68回　全国公立学校教頭会研究大会　札幌大会


第68回　全国公立学校教頭会研究大会　札幌大会
挨拶
全国公立学校教頭会　会長
大髙　珠恵


SAPPORO CONV


SAPPORO


NTION CENTER




VENTION CENTER


第68回　全国公立学校教頭会研究大会　札幌大会
シンポジウム




【演題】
「子どもたちに必要な創造性とは何か」
～音楽プロデューサーの
現場から見た学びの本質～


第68回 全国公立学校教頭会研究大会
札幌大会
研究の手引き
基調提案
全国公立学校教頭会 研究部







全国共通研究課題及び研究の視点

第１課題（第1A分科会・第1B分科会）　教育課程に関する課題

＜研究の視点＞

- □ 信頼される学校づくりに資する「社会に開かれた教育課程」の編成・実施・評価・改善（カリキュラム・マネジメントの推進と教職員の参画）
- □ 教育目標の設定と具現化
- □ 児童・生徒に育成を目指す資質・能力
- □ 教育課程の実施と学習評価
- □ 学校段階間の接続と連携
- □ 家庭や地域との連携及び協働

第２課題（第２分科会）　子供の発達に関する課題

＜研究の視点＞

- □ 確かな学力の確実な定着
- □ 児童生徒の豊かな人間性の育成
- □ 児童生徒の健康・体力の増進
- □ たくましく未来を切り拓く力やこれから求められる資質・能力の育成
- □ その他、児童生徒の発達を支える教育課題

第３課題（第３分科会）　教育環境整備に関する課題

＜研究の視点＞

- □ 児童生徒の安心安全
- □ 学校の施設設備
- □ 学校、家庭、地域との連携と協働
- □ 教育DXを推進する取組
- □ 文書事務、経理事務の管理
- □ 学校規模適正化



第４課題（第４分科会）　組織・運営に関する課題

＜研究の視点＞

- □ 学校運営全般
- □ 人材育成や組織力向上
- □ リスク管理や危機管理
- □ 地域連携（コミュニティ・スクールなど）
- □ 異校種間連携
- □ その他、組織・運営

第５課題（第5A分科会・第5B分科会）　教職員の専門性に関する課題

＜研究の視点＞

- □ 教職員の専門職意識の高揚
- □ 教職員の指導力等の育成
- □ 教職員の研修
- □ 教職員の服務
- □ 学校段階間連携を通した、教職員の課題意識の向上
- □ 教職員の協働体制の構築
- □ 教職員の学校運営参画意識の向上

第６課題（第６分科会）　副校長・教頭の職務内容や職務機能に迫る課題

＜研究の視点＞

- □ 「学校・教師が担う業務に係る３分類」に基づく業務適正化
- □ チーム学校における職務内容
- □ 効率的な学校運営
- □ 教職員の働き方改革
- □ 教職員の支援
- □ 副校長・教頭候補者の育成

特別課題（特別Ⅰ分科会）　時宜に応じた課題

＜研究の視点＞

- □ 働きがいを高め、教職員を育て、つなげるための学校としての取組と副校長・教頭の役割

特別課題（特別Ⅱ分科会）　開催地の創意を生かした課題

＜研究の視点＞

- □ 地域の特性を生かした教育活動の推進
- □ 地域や社会と取り組む学校づくりの推進
- □ 地域の歴史を生かした教育活動の推進



分科会提言テーマ

分科会	課題	提言テーマ	提言者
第1A	教育課程に関する課題	**地域が抱える課題を共有し、 解決に向けた教育課程の工夫** ―「地域とともにある学校」を 実現するための地域との協働体制の構築を通した 「会津ならでは」の 学校づくりを目指して―	福島県 会津坂下町立坂下南小学校 **大関　貴之**
		主体的に学び小樽の未来を創る 豊かな人づくりを目指す活力ある学校づくり ―カリキュラム・マネジメントを軸とした 学校改善を図るために教頭はどう関わるか―	小樽市 小樽市立忍路中央小学校 **古館　幸恵**
第1B		**連携型小中一貫校（分離型）における 特色を生かした教育課程の編成について** ―藤岡市の進める一貫校構想の 組織的な対応と教頭の関わりについて―	群馬県 藤岡市立東中学校 **坂爪新太郎**
		檜山の特色を生かし未来を切り拓く力を育む 魅力ある教育活動の推進と教頭の役割 ―ふるさとに根差す活力ある教育課程づくり―	檜山 乙部町立乙部中学校 **甲谷美映子**
第2	子供の発達に関する課題	**21世紀をたくましく生き抜く 子供の豊かな人間性の育成** ―不登校の未然防止に向けた取組を通して―	愛知県 みよし市立三好中学校 **廣瀬　　徹**
		ウェルビーイングを基軸とした 学校経営と教頭の新たな役割 ―北海道帯広市の体系的な実践から学ぶ 教頭のマネジメント機能の強化―	帯広市 帯広市立大空学園 義務教育学校 **十倉　智秀**
第3	教育環境整備に関する課題	**地域と共に歩む魅力ある学校づくり** ―学校運営協議会のさらなる充実に向けた 教頭の役割―	和歌山県 古座川町立明神小学校 **小賀　亜己**
		安心して学び、共に成長できる 教育環境整備における教頭の役割 ―校内支援体制の再構築と 「しなやかに歩み続ける力」を育む学校づくり―	函館市 函館市立旭岡中学校 **鈴木　　亮**



分科会	課題	提言テーマ	提言者
第4	組織・運営に関する課題	**小規模な教頭会組織による 研究大会運営に向けての取組** ―11人で281名の教頭先生をおもてなし―	島根県 江津市立青陵中学校 **升本　広幸**
		未来を切り拓く豊かな人間性と 創造性を育む活力ある学校づくり ―活力ある学校をつくる 「組織・運営」における教頭の関与の在り方―	函館市 函館市立桔梗小学校 **佐藤　　知**
第5A	教職員の専門性に関する課題	**若手教員の 授業力向上に向けた教頭の関わり** ―「松山の授業モデル」の実現に向けて―	愛媛県 松山市立北条南中学校 **山中　誠弘**
		夢と志をもち未来を切り拓く力を育む 活力ある学校づくりの推進 ―教頭間の日常的なつながりを基盤とした 質の高い教職員集団の育成―	釧路市 釧路市立愛国小学校 **渡部　　潤**
第5B		**教職員の資質・能力の向上を 図るための教頭の関わり** ―授業改善を核とした連携・協働を通して―	沖縄県 宮古島市立狩俣中学校 **仲間　　智**
		学校段階間連携を通した、 教職員の学校運営参画意識の向上 ―18年間を見据えた保小・小中・中高連携の 取組の推進と教頭の役割―	オホーツク 紋別市立潮見小学校 **上野さえ子**
第6	副校長・教頭の職務内容や職務機能に迫る課題	**①全公教の調査結果分析と考察** **②講演　「日本の副校長・教頭を海外のスクールマネジメントから考える」** ―全国公立学校教頭会の調査を受けて ― **講師：藤原　文雄　氏 文部科学省国立教育政策研究所教育政策・評価研究部長**	
特別Ⅰ	時宜に応じた課題	**「副校長・教頭の働きがいを高める学校マネジメント」** **講師：青木　栄一　氏 東北大学大学院教育学研究科・教育学部教授**	
特別Ⅱ	開催地の創意を生かした課題	**「地域の特性を生かした体験活動を通した豊かな心身の育成」** ―積雪寒冷地における地域や社会と取り組む学校づくり ― **講演１：スポーツ庁政策課教科調査官　岩田　悟　氏 「豊かな心は健やかな体から」 講演２：北海道オールオリンピアンズ　GeneralManager　鈴木　靖　氏 「地域のスポーツ資源を生かした学校づくり ―多様な体験活動を通した共生社会の実現に向けて―」**	



分科会	課題	会場	助言者		提言者	
			校長	行政	全国	北海道
第１Ａ	教育課程に関する課題	１階 大ホール Ａ	藤長あかね 徳島県 鳴門市立 里浦小学校長	佐藤　鮎美 北海道教育庁 学校教育局 義務教育課 義務教育指導係主査	大関　貴之 福島県 会津坂下町立 坂下南小学校	古館　幸恵 北海道 小樽市立 忍路中央小学校
第１Ｂ		１階 大ホール Ｂ	目時　聖児 青森県 平内町立 平内中学校長	吉田　卓矢 札幌市教育委員会 学校教育部教育課程 担当課義務教育担当 係指導主事	坂爪新太郎 群馬県 藤岡市立 東中学校	甲谷美映子 北海道 乙部町立 乙部中学校
第２	子供の発達に関する課題	１階 大ホール Ｃ	山口　靖博 新潟県 新潟市立 白根北中学校長	永野間雅博 北海道教育庁生徒指導・学校安全対策局生徒指導・学校安全課不登校児童生徒支援係主査	廣瀬　　徹 愛知県 みよし市立 三好中学校	十倉　智秀 北海道 帯広市立大空学園 義務教育学校
第３	教育環境整備に関する課題	１階 特別 会議場	関原　一久 千葉県 市川市立 真間小学校長	髙橋　謙介 札幌市教育委員会学校教育部教育課程担当課義務教育担当係 指導主事	小賀　亜己 和歌山県 古座川町立 明神小学校	鈴木　　亮 北海道 函館市立 旭岡中学校
第４	組織・運営に関する課題	１階 107・108 会議室	齋藤　健一 埼玉県 熊谷市立 荒川中学校長	柳沼　慶祐 北海道教育庁 石狩教育局教育支援課 学校教育指導班主査	升本　広幸 島根県 江津市立 青陵中学校	佐藤　　知 北海道 函館市立 桔梗小学校
第５Ａ	教職員の専門性に関する課題	１階 中ホール Ａ 向かって左	支倉　圭太 神奈川県 川崎市立 柿生小学校長	アルティみお 札幌市教育委員会教職員担当部教職員育成担当課研修担当係 指導主事	山中　誠弘 愛媛県 松山市立 北条南中学校	渡部　　潤 北海道 釧路市立 愛国小学校
第５Ｂ		１階 中ホール Ｂ 向かって右	牧野　忠和 愛知県 豊川市立 御油小学校長	山本　泉美 北海道教育庁 学校教育局教職員育成課人材育成・教育研究所 整備推進係長	仲間　　智 沖縄県 宮古島市立 狩俣中学校	上野さえ子 北海道 紋別市立 潮見小学校
第６	副校長・教頭の職務内容や職務機能に迫る課題	２階 204 会議室	＜全公教　総務・調査部担当＞ ①全公教の調査結果分析と考察 ②講演　「日本の副校長・教頭を海外のスクールマネジメントから考える」 －全国公立学校教頭会の調査を受けて－ 講師：藤原　文雄　氏 文部科学省 国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部長			
特別Ⅰ	時宜に応じた課題	２階 小ホール 206・207 会議室	＜全公教　研究部担当＞ 「副校長・教頭の働きがいを高める学校マネジメント」 講師：青木　栄一　氏 東北大学大学院教育学研究科・教育学部教授			
特別Ⅱ	開催地の創意を生かした課題	２階 201・202 会議室	＜札幌大会実行委員会担当＞ 「地域の特性を生かした体験活動を通した豊かな心身の育成 －積雪寒冷地における地域や社会と取り組む学校づくり－」 講演１「豊かな心は健やかな体から」 講師：岩田　悟　氏　スポーツ庁政策課教科調査官 講演２「地域のスポーツ資源を生かした学校づくり －多様な体験活動を通した共生社会の実現に向けて－」 講師：鈴木　靖　氏　北海道オールオリンピアンズGM			



分科会	会場責任者	運営委員		司会者	記録者	IT担当者
		全公教	北海道			
第１A	阿部　紫乃 札幌市立伏見中 浦崎　　楽 札幌市立宮の森中	松谷　雄一 青森県 青森市立 新城小学校	齋藤　直樹 札幌市立もみじの丘小 庄子　京平 江別市立江別第一小	水口　優徳 札幌市立 柏中学校	中村　英之 札幌市立 啓明中学校	田口　　牧 札幌市立中央小 安尻　太郎 札幌市立幌西小
第１B	石井　一嘉 札幌市立北辰中 佐藤　　敦 札幌市立篠路西中	鈴木　克明 栃木県 宇都宮市立 晃陽中学校	森岡　香子 札幌市立八軒中 白井　尚史 小樽市立西陵中	佐藤　智子 札幌市立 太平中学校	蒲谷　貴史 札幌市立 新琴似中学校	山本　泰寛 札幌市立大倉山小 斉藤　健一 札幌市立資生館小
第２	宇佐美智大 札幌市立福移学園 酒井　昭義 札幌市立札苗北中	安藤　貴康 岐阜県 岐阜市立 岐阜清流中学校	渡部　　堅 札幌市立前田北中 後藤　　健 札幌市立西野小	相澤　聖子 札幌市立 明園中学校	前　　研治 札幌市立 篠路中学校	堀田　　淳 札幌市立新琴似小 牧野　元樹 札幌市立あいの里東小
第３	名久井あけ美 札幌市立日章中 前　　忠宏 札幌市立米里中	長政　浩之 兵庫県 姫路市立 前之庄小学校	岡本　功一 札幌市立栄東小 皆川慎太郎 札幌市立南が丘中	木村　由久 札幌市立 西岡北中学校	了源　一也 札幌市立 北栄中学校	中村　　基 札幌市立屯田北小 酒巻　　智 札幌市立札苗緑小
第４	菅谷　昌弘 札幌市立厚別中 渋谷　啓一 札幌市立厚別南中	武末　尚子 山口県 防府市立 牟礼南小学校	高橋　　学 余市町立西中 丸山　　悠 札幌市立桑園小	森山　正樹 札幌市立 平岡緑中学校	柾本　結哉 札幌市立 北白石中学校	北本　泰司 札幌市立東橋小 桜庭　健一 札幌市立大谷地小
第５A	只野　智章 札幌市立西岡中 銘苅　明彦 札幌市立あやめ野中	藤崎　裕子 香川県 高松市立 木太中学校	今野　信彦 南幌町立南幌小 丸山　浩太 札幌市立琴似中	佐々木絵里子 札幌市立 澄川中学校	高柳　裕一 札幌市立 東月寒中学校	村﨑　浩一 札幌市立西岡小 佐藤　誉倫 札幌市立平岡中央小
第５B	片山　慎司 札幌市立清田中 關本　孝紀 札幌市立平岡中央中	江原　秀則 大分県 大分市立 別保小学校	笹野　直人 札幌市立西岡北小 阿部　　哲 岩見沢市立緑中	塚崎　　亮 札幌市立 藤野中学校	北村　　力 札幌市立 北野中学校	髙野京一郎 札幌市立藤の沢小 水谷　彰男 札幌市立発寒小
第６	高野　　聖 札幌市立真駒内中 岡崎麻衣子 札幌市立真駒内曙中	矢花　誠伺 東京都 足立区立 関原小学校	青木　啓洋 恵庭市立 恵庭小学校	細内　　淳 宇都宮市立篠井小 山下　恵子 四街道市立和良比小	今枝　映人 札幌市立 義務教育学校 定山渓学園	阿知良　学 札幌市立発寒東小 成田　剛俊 札幌市立西野第二小
特別Ⅰ	村上　志行 札幌市立陵北中 宮北　弘樹 札幌市立宮の丘中	高橋　浩美 安中市立秋間小 山口　洋司 大井町立湘光中	小路　美和 札幌市立 向陵中学校	道佛　智志 札幌市立 北野小学校	牧　　典子 札幌市立 手稲東中学校	佐々木洋介 札幌市立八軒西小 中田　卓良 札幌市立富丘小
特別Ⅱ	阿部　晋也 札幌市立手稲中 佐藤　貴之 札幌市立前田中		中島　大輔 札幌市立緑丘小 伊藤健士郎 札幌市立百合が原小	吉田　英明 札幌市立 西野中学校	新保　　充 札幌市立 稲穂中学校	數野　陽子 札幌市立前田小 赤間　　茂 札幌市立前田北小



第1Ａ分科会

研究課題「教育課程に関する課題」



1　協議の柱

（1）校種間の連携と持続可能な地域協働体制を確立するための副校長・教頭の役割
（2）信頼される学校づくりに資する小中９年間の教育課程の工夫と副校長・教頭の関与

2　協議の内容

（1）にかかわって

・校種間連携や地域とのつながりを持続可能な取組として発展させるためには副校長・教頭だけが中心となって進めるのではなく、他の教職員を積極的に巻き込み、組織全体で取り組む体制を構築することが重要である。副校長・教頭が培ってきた異校種や地域とのネットワークを校内へと広げ、多くの教職員が主体的に関わることで連携は一過性のものではなく、持続可能な教育活動として定着していくものと考える。
・地域の方々や教育委員会など、多様な関係者との協働が欠かせない。それぞれが役割を分担し、学校内外の人的・社会的資源を有効に活用することで、連携の幅はさらに広がり、継続的な取組として発展していくと考える。
・副校長・教頭には、校種間や地域との連携を推進するコーディネーターとしての役割が求められる。幼稚園、保育所、小学校、中学校、高等学校では、それぞれ教育観や学校文化、指導方法に違いがある。その違いを理解し合い、それぞれの特色や強みを尊重しながら協働できるよう、相互の橋渡し役となることが副校長・教頭の重要な使命である。
・校種間連携は、異なる校種の学びや人との関わりを通して、自らの存在価値を認識でき、自己肯定感や自己有用感の向上につながる。そのような視点を共有しながら連携を進めることが、教育活動の充実につながると考える。

（2）にかかわって

・地域連携担当教員や研修部の教員を教育課程編成に関わる会議へ積極的に参加させ、多様な視点から教育活動を検討できる仕組みを整える必要がある。副校長・教頭には、教職員一人一人が連携の当事者として参画できる環境を整える役割が求められる。
・校種間連携の目的は、異校種の教育課程や指導内容を理解することだけではなく、児童・生徒が交流し、互いに学び合う機会を設けることが大切である。そのためには、目指す子供像やグランドデザインを共有し、学びの系統性や育成したい資質・能力について共通理解を図ることが不可欠である。
・学校運営協議会における熟議では、学校・地域が同じ教育ビジョンを描き、子供の学び方を共有することが重要である。コミュニティ・スクール委員が、子供の成長を９年間にわたり継続的に見守ることができれば、地域全体で子供を育てるという意識が高まり、学校への信頼も一層深まると考える。
・学校が信頼されるためには、地域や保護者の願いや要望を把握し、教育活動へ反映させる姿勢が必要である。子供たちが安全・安心に学ぶことのできる学校づくりを進めるとともに、連携の成果や子供の成長を積極的に発信し、活動の見える化を図ることも重要である。

3　まとめ

・教育課程の編成において、地域との連携や小中９年間を見通すことは、子供の学びと成長を実現するための手段であり、どのような子供の成長の姿を目指すのかを目的とすべきである。何を実践したかよりも、子供がどのように成長し、目指す子供像に近付いたか、という視点で工夫、改善すべきである。
・９年間を見通した教育課程の中心にあるのは授業である。小学校と中学校が、子供の育成像を共有し、どのような資質・能力を育むのか、どのように学ぶのかについて対話を重ねることが重要である。教職員も学び続け、挑戦し続ける姿勢が重要であり、その姿そのものが、子供たちが夢と志をもち生きていく力を育むことにつながると考える。

第1B分科会

研究課題「教育課程に関する課題」



1　協議の柱

（1）９年間の学びをつなぐ組織的な連携体制と学校間調整のための副校長・教頭の役割
（2）地域の人的・物的資源を「ふるさと教育」に利活用するための副校長・教頭の役割

2　協議の内容

（1）にかかわって

・藤岡市では五つの連携型小中一貫校を設置。「藤岡教育」という理念のもと、持続可能な社会の担い手を育てる環境づくり（ESD等）を取り入れ、９年間を見通した教育課程を推進している。
・授業づくりでは「これまで・ここでは・このあとは」を意識し、学習規律、生活習慣、情報活用能力、表現力を系統的に育成。「つなぎ教材」やネームプレート等も活用している。
・中１ギャップの軽減に向け、生徒指導・特別活動・教科指導で小中が連携。小学校では地域を知り、中学校では地域課題を探究するなど、発達段階に応じた学びを構成している。
・兼務教員の申請・加配により小中を行き来する校種間人事を進めている。管理職間の連携、校内体制づくり、調整・連絡役としての副校長・教頭の役割が重要であり、不登校支援や学習支援の充実にもつながっている。
・課題は地域の小規模化。今後は統廃合後の学校施設を不登校支援に活用するなど、「学びの多様化」を具体的に検討していく。
・学校間で「目指す子供像」を共有し、防災教育、不登校支援、幼保との接続等にも連携を広げる。副校長・教頭だけでなく周囲を巻き込み、外部とのハブとなりながら学校の独自性も生かす。
・次期学習指導要領で想定される「調整授業時数制度」も見据え、９年間を見通した教育のビジョンを明確にすることが必要。今後は３Ｃ（継続性・協働性・関与性）が重要である。

（2）にかかわって

・人口減少・少子高齢化が進む檜山において、学校規模にかかわらず質の高い教育を実現するため、地域資源を生かした「ふるさと教育」を推進している。
・教頭会で「共同知」の構築を進め、令和５年度は計画立案、６年度は「ふるさと教育データベース」化、７年度は量的・質的支援による活用深化へと発展。伝統芸能、エネルギー、地場産業等を学習資源としている。
・９年間で育てるコンセプトとルーブリック評価を重視し、情報システム「SLUG」も活用している。
・課題は、ふるさと教育を単なる体験で終わらせず、教科横断・キャリア教育の視点から探究的な学びへ転換すること。各教科との関連を図りながら教育課程全体に位置付ける必要がある。
・継続性を高めるには、学校だけでなく地域が主体となる仕組みも有効。副校長・教頭は人とのつながりを大切にし、子供の声や近隣の小・中・高校の取組など、身近な資源を丁寧に把握する。
・コンテンツ以上に「人から人へつなぐ」ことが重要。ベテランから若手への継承など、人と人の心の距離を縮める基本を大切にする。
・「何のためのキャリア教育か」を問い直すとともに、地域資源を見つめ直す視点が必要。札幌であれば「雪」「環境」「読書」なども特色ある学びの資源となり得る。

3　まとめ

・二つの提言に共通するのは、９年間を見通した明確なビジョンと、学校・校種・地域・人をつなぐ仕組みづくりである。
・副校長・教頭には、連絡調整にとどまらず、人や資源をつなぐハブ・コーディネーターとして、３Ｃ（継続性・協働性・関与性）を意識し、組織的・持続的な教育活動へ導く役割が求められる。
・自校においても、小中一貫した「目指す子供像」を共有し、地域資源を探究的な学びへつなげる視点を教育課程に位置付けることが重要である。



第2分科会

研究課題「子供の発達に関する課題」



1　協議の柱

（1）不登校支援の持続可能なシステム構築のための協働体制をつくる副校長・教頭のマネジメント
（2）非認知能力・自己肯定感の育成とウェルビーイングを基軸とした学校経営における副校長・教頭の新たな役割

2　協議の内容

（1）にかかわって
・不登校支援は「未然防止」と「既に不登校の児童・生徒への支援」を両輪で進める必要がある。
・地域連携・医療連携・校内フリースクールは、共通して「多様な人とのつながりによる自己肯定感向上」を目的としている。
・メタバースは新たな支援策として有効である一方、対面による人間関係の構築も引き続き重視する必要がある。
・副校長・教頭は「人をつなぐコーディネーター」として、地域・医療・保護者・教職員を組織的に結び付ける役割を担う。
・副校長・教頭の本質的役割は、「直接的な支援」よりも、「支援が機能する仕組みの構築」にある。
・AI時代でも、不登校支援は「人と人の関係性」が核心であり、副校長・教頭のマネジメントが力を発揮する領域である。
・個別の支援においては「児童・生徒の声を丁寧に聴くこと」を最優先とし、押し付けとならない配慮が求められる。
・アウトリーチ型支援は教育関係者だけで完結させない。医療・福祉等との多機関連携を進めることで、組織的かつ持続可能な支援体制を構築することが重要である。

（2）にかかわって
・ウェルビーイングは新しい施策ではなく、「教育活動全体の土台」である。学校が楽しい・安心できるという環境づくりが根幹となる。
・多様な支援策や取組を「ウェルビーイング」という共通理念のもとで統合・推進していくことが重要である。
・地域行事への参加や地域人材による学習支援等を通じ、「学ぶ・体験する・貢献する」機会を確保することが、児童・生徒の社会性や自己肯定感の育成につながる。
・副校長・教頭は、従来の「縁の下の力持ち」にとどまらず、学校の価値をデザインし、理念を共有しながら関係者をつなぐ「マネジメント層」への転換が求められる。
・担当者の異動に左右されないよう、取組を組織的な「学校文化」として定着させることが、副校長・教頭の使命である。
・副校長・教頭自身のウェルビーイング確保は、学校の支援体制の持続可能性に直結する。業務改善や役割分担、外部人材の活用を進め、マネジメントに専念できる環境整備が必要である。

3　まとめ

・人や関係機関をつなぐ「コーディネート機能」の強化。
・支援が円滑に機能する「仕組みづくり」。
・人事異動等に対応し、特定の教職員に依存しない「持続可能な支援体制の整備」。地域・医療・家庭・学校が一体となった「誰一人取り残さない支援体制」を構築するため、副校長・教頭のマネジメント力を更に向上させていく必要がある。
・非認知能力等の育成においては、児童生徒の変容（自己肯定感・学習意欲・社会参加意識等）を指標化し可視化することで、組織の目的を明確にし、成果を適切に発信していく役割が期待される。



第3分科会

研究課題「教育環境整備に関する課題」



1　協議の柱

（1）学校と地域の協働を深化させ、学校運営に地域の力を生かすための副校長・教頭の役割

（2）校内支援体制を再構築し、多様な背景をもつ児童・生徒の「居場所」を保障するための副校長・教頭の役割

2　協議の内容

（1）にかかわって

・学校と地域の協働を深化させるには、本提言にもあるように地域学校協働活動と学校運営協議会とを相互に連動させ、推進力を更に高める必要がある。地域学校協働活動と学校運営協議会の連携の在り方については課題を抱える地域がある。

・地域に対してCSの理念や育てたい子供像の共有と理解が不足していると考えられる。本提言にもあるように、CSに対する理解の更なる浸透、校種間の連続性、その経過と成果や課題の可視化をどう進めていくかが重要である。そのためには、小中学校教員のCSについて共有したビジョンを地域に伝え、子供の困り感を把握しながら、心に寄り添うための工夫をし、「子供たちのためのCS」を目指すことが大切である。

・学校では、教師の多忙化や時間確保の難しさ、また、取り巻く地域の少子高齢化が進む中で地域活動においても地域の担い手不足や特定の人への負担が偏る傾向にあり、CSを推進させる上で大きな課題の一つでもある。本提言にもあるように学校・地域等、CSに関わる方々のウェルビーイングの向上を見据えながら進めていく必要がある。

（2）にかかわって

・校内支援体制を整えるため、個人に依存しない「組織的な支援体制」にするため、校内教育支援センター（サポートルームセンター）を中心に、学びの支援委員会や学年との連動を強化することが大切である。さらに校内教育支援センターの支援状況を可視化できる仕組みやそれに関わる組織体制の再構築が必要である。

・子供たちの居場所づくりでは、静かに過ごす場所の確保にとどまらず、自分の状態に合わせて過ごし方を選べる環境や、人と関われる環境を整えることが大切である。そうした居場所で得られた安心感を土台にすることで、子供たちの学びをさらに深めていくことができる。

・校内教育支援センターを「安心できる居場所」とするため、子供一人一人の実態に応じた運営を行い、主体的に学びの場を選べる環境を整えることが大切である。まずは、居場所での安心感を土台とし、多様な学びへ挑戦できる環境をつくることで、成功体験を重ね、確かな自信へとつなげていくことができると考える。

3　まとめ

・今後も学校運営協議会を中心として学校と地域が少しでもスムーズに連動・協働するために副校長・教頭が関係者との情報共有や連絡調整を行う中心になる必要がある。さらに学校と地域が関わりやすくするために、役割分担を進め、各関係者が主体的に参画できる仕組みづくりが大切である。

・副校長・教頭が校内外の人材等の教育資源を効果的に結び付けながら、CSマイスター等を活用し、学校運営協議会が熟議の場となるような仕組みづくりや、校内ではCSに関わる活動を教育活動に上手く取り込めるようにするなど、学校・地域や保護者と「信頼」を作るコーディネート力を発揮することが重要である。

・教室に入れない児童・生徒が安心して学べる環境づくりが重要であり、多様な学びを持続させるためには一人一人に応じ、学びや社会的自立へ向けた学習を持続するため、デジタル学習の効果的な活用、また、多様な学びを選択した子供の努力をどう評価・評定していくかが課題である。副校長・教頭は、子供が多様な学びから社会的自立へとつなげる活動に継続的に取り組むための体制づくりの中心となることが肝要である。



第4分科会

研究課題「組織・運営に関する課題」



1　協議の柱

（1）組織体制の見直しと業務の精選・委託を通して、効率的かつ持続可能な研究大会や研究の在り方、学校づくりにつなげる副校長・教頭の役割

（2）学校マネジメントを強化し、組織的に教育活動を推進する活力ある学校づくりにおける副校長・教頭の役割

2　協議の内容

（1）にかかわって

・小規模組織で大会運営を行う江津市の事例では、従来の運営方法をそのまま踏襲するのではなく、副校長・教頭が中心となって既存の業務内容を大幅に廃止、もしくは業務委託することで、教職員の負担軽減と本質的業務への集中を促すことができ、業務の再設計を行う必要性が強調された。

・可能な業務に専門性の高い外部人材を活用することで、「分科会の質向上」に注力し、効率的かつ持続可能な研究大会となった。紙媒体を廃止して、資料を全てデータ化し、参加者はタブレットで資料を閲覧できるようにするなど、ICTの活用が大会運営の効率化に大きく寄与した。

・江津市教頭会の結束力が今まで以上に高まり、組織が前向きに動くことで学校全体の雰囲気が変わった。副校長・教頭は「組織の空気をつくる存在」であるという視点が共有された。

（2）にかかわって

・「活力ある学校づくり」を主題に、令和５年から３年間の研究を推進した。全国的な課題である危機管理や連携不足の解消に向け、「地域学校協働活動」「幼保小連携」「安全教育」の３分野を設定し、アンケートによる実態把握から事例共有、副校長・教頭の関与の在り方の検証まで計画的に取り組んだ。

・地域行事での教職員の負担軽減を図るために「つなぐ・支える・見守る」という役割に徹した事例や、幼保小連携の推進協議会設立、外部機関と連携した防災訓練の橋渡しなど、校内外の調整役として組織の機能向上と連携基盤の整備を主導した。

・時代が変わっても持続的に発展し、自律して動き出す「自走する組織」の確立を目指している。学校だけで課題を抱え込まず、地域の多彩なリソースを有効活用して働き方改革を推進。教職員の心理的安全性を確保して意欲を高めることで、教職員自身のウェルビーイングと学校全体の教育力を高める取組を行った。

3　まとめ

・組織体制の見直しや業務の削減・委託、ICT活用による完全ペーパーレス化により、小規模でも持続可能な大会運営と経費削減を実現した。慣例にとらわれない大胆な効率化は、副校長・教頭が「分科会の質向上」に注力できる環境を生み出しただけでなく、教職員の結束力を高め、組織のウェルビーイング向上にもつながる。

・副校長・教頭は、業務の棚卸し、外部との連携、ICT推進、校長会との調整など、組織をけん引する中心的な役割を担っており、これらの実践は研究大会だけでなく、日常の学校づくりにも応用でき、持続可能な学校運営のモデルとなると考えられる。

・時間を生み出すことは「何を減らすか」ではなく、「何のために時間を生み出すのか」という目的を共有することの大切さが話し合われた。また、生み出した時間を、教職員が学び合い、対話し、当事者として学校づくりに関わる時間（人を育てること）へと変えていくことが重要であることが示された。

・安心して相談・挑戦でき、子供の成長を喜び合える風土があって初めて、「この学校で働けて良かった」という働きやすさや充実感が生まれる。忙しさの中にも、自分の仕事が子供の成長につながっているという確かな実感をもてる学校づくりが必要である。



第5A分科会

研究課題「教職員の専門性に関する課題」



1　協議の柱

（1）若手教員の働きがいと授業力向上の両立を図るための副校長・教頭の役割
（2）「学び合う教頭会」の深化と活力ある学校づくりを目指した副校長・教頭の役割

2　協議の内容

（1）にかかわって
・得意分野を一覧化した「専門性メニュー表」の作成や、プロの授業を見学する「授業マイスター制度」の活用。
・若手が強み（ICTなど）を発揮できる場面の意図的な提供。
・面談による悩み聞き取りや、枠にとらわれない外部情報の提供・時間作り。
・定時帰宅やプライベートの充実を肯定し、時代や働く人の意識の変化に管理職（校長・副校長・教頭）側が適応していく大切さ。
・時間の生み出し方:午前中に５時間分授業を行って放課後にフリー時間を作り、研修やミーティングの時間を生み出している小学校の事例が紹介された。
・組織を活性化させるためには、トップダウンでもボトムアップでもなく、ミドルトップダウンが必要である。そのために、副校長･教頭は、ミドルリーダーを育てていく必要がある。
・副校長・教頭はナビゲーターであり、ファシリテーターであり、コーディネーターである。それぞれの場面での適切な関わりが必要となる。

（2）にかかわって
・同一校区内の副校長・教頭同士でチャット等を活用し、災害時や野生動物（鹿・熊等）の出没、不審者対応などの情報を即時に共有・対応している。運動会や各種行事に向けた取組など、学校間の情報共有が非常に有効である。
・単に学び合うだけでなく、集まって悩み相談やリフレッシュができる場の存在が重要である。副校長・教頭自身が元気になることで、結果として活力ある学校づくりにつながる。
・授業改善の重要性に対し時間不足という課題があるため、小学校における教科担任制等の有効活用について話し合われた。
・校長とは異なる「副校長･教頭独自の視点」を活かし、今後は教頭会から政策提言を行っていくべきである。
・PTA参加率の低下や異動の悩みなど本音の議論が最も盛り上がり、副校長・教頭が元気になるためには「学び合う」だけでなく「語り合う教頭会」であることが重要であるとまとめられた。

3　まとめ

・技術的支援：授業モデルの浸透による授業品質の標準化と向上。心理的支援：ランチミーティングや相談窓口の設置による働きやすさと働きがいの両立。
・ミドルリーダー層の不足に対し、組織的なメンター制度の構築や他校との連携、副校長・教頭の伴走者としての役割が重要である。
・地域や学校の実態に合わせた「最適化」が有効なマネジメントであり、若手が安心して失敗・受容されながら成長できる基盤づくりが重要である。
・若手を厳しく指導するのではなく、立場に寄り添った声掛けや配慮が重要とされた。
・若手が困った際に「困った」と言える職場環境づくりと、副校長・教頭によるサポートが必要である。
・管理・統制型の危機管理ではなく、教職員が主体的にリスクを予測・対応できる組織づくりを目指す。
・投稿数が減少傾向になるICT活用において、失敗事例や未完成の指導案･ワークシートをあえて共有（弱さの共有）することでハードルを下げる。
・在任期間が短い教頭職だからこそ、教頭会で得た知見を校長と熱く語り合い、学校経営方針と同期させることが不可欠である。
・副校長・教頭が変われば教職員が変わる。教職員が変われば子供たちが変わる。子供たちが変われば未来が変わっていく。



第5B分科会

研究課題「教職員の専門性に関する課題」



1　協議の柱

（1）一人一人のウェルビーイングの実現に向け、授業改善を核とした連携・協働に関する副校長・教頭の役割

（2）活力ある学校づくりを目指し、教職員の学校参画意識を高めるための異校種間連携等に関する副校長・教頭の役割

2　協議の内容

（1）にかかわって

・学校の規模に関わらず、チーム担任制や教科担任制の導入を通じて教職員が組織的に同じ方向を向き、地域の理解と協力を得ながら進めることが、教員の心理的負担の軽減と持続可能な学校運営につながる。

・小中連携の推進や10年経験者研修に合わせた市教委主導のOJT研修、管理職による積極的な授業参観、優れた実践の情報発信や職員向けのお便りの発行などにより、学校風土をよりよく高めていく。

・テスト採点日の設定、会議のペーパーレス化、４月職員会議は１回のみ、PTA活動の削減とコミュニティ・スクール（CS）によるカバー、および校務支援システムの活用などを通じて業務効率化を図り、時間の余白を生み出すことが教職員のモチベーション向上につながる。

・子供たちと一緒に学校を作り上げていくことを大切にし、多様な世代の教員配置による授業改善や校内研修、先進校への若手・ベテランの派遣、特定のメンターに頼らず全教職員で若手を育てる環境づくりを通じて、学校全体のウェルビーイングを高めていく。

・授業改善に向けて教職員に寄り添う伴走者となり、小中連携の仕組み構築やICT環境の整備を進めるとともに、新しい情報の提供や地域・行政と教職員の架け橋となることで、教職員が同じ方向を向いて自走できるように支援していく。

・ミドルリーダーが主体となった研修による授業改善や、個に応じた心理的安全性および研修機会の確保、曜日固定による研修時間の創出やスクラップ＆ビルドを進める一方、地域の要望による停滞、チーム担任制におけるルール徹底の課題、教職員が自分事としてとらえることの重要性という現状を踏まえて取り組んでいく。

（2）にかかわって

・中学校の明確な役割分担による組織的な動きを活かし、それぞれの教職員に役割をもたせて参画意識を高め、互いに褒め合うことで良い循環を生み出す。

・部活動の時間短縮やテスト回数の制限といったスクラップ＆ビルドを断行し、明確な役割分担によって教職員の当事者意識を引き出す。

・無理のない小さな連携から始め、幼保小中高18年間を見据えた縦断的アプローチにより、子供たちの学びを滑らかにつなぐ。

・必要なところやできるところから無理なく始め、オンラインを活用した乗り入れ授業や中学生による小学校での職場体験、学校運営協議会を通じた小中合同連携を推進する。

・異校種間のズレや交流の停滞を解消するため、教職員の相互勤務などを通じて内部理解を深め、前面に出すぎず任せながら同じ方向へ向かうよう助言する。

3　まとめ

・やりがいと支え合いの環境づくり、教職員自身の学びとウェルビーイングの向上を軸に、対話型の校内研修や授業改善、業務効率化と心理的安全性の確保を通じて、教職員が協働的に資質を高め合える学校づくりを進めていくには、副校長・教頭の役割が重要である。

・教職員の心理的安全性を守り育てるカウンセラー、教育課程の優れたデザイナー、多様な資源を結び付ける俊敏なコーディネーター、そしてウェルビーイングを高める学校運営の牽引者として、副校長・教頭が挑戦できる活力ある学校づくりが重要である。



第6分科会

研究課題「副校長・教頭の職務内容や職務機能に迫る課題」



1　全国公立学校教頭会の調査

全公教の令和７年度に実施した「全国公立学校教頭会の調査」の結果報告より、日本の公教育の基盤を揺るがす深刻な実態がエビデンスとして示された。

・教員未配置の深刻化
　全国の公立小中学校の約20%で年度当初から教員が未配置であり、年度途中でも解消されていない。
・穴埋めの限界
　未配置校において副校長・教頭が担任代替や授業の一部を担うケースが常態化しており、本来のマネジメント業務が圧迫され、約半数が12時間以上の勤務を強いられている。
・高度な危機管理能力の要求
　教員不足や多様化する保護者・地域との利害調整に伴い、負担に感じる職務のトップは５年連続で「苦情対応」となっている。これらの構造的な課題に対し、全公教は国や自治体へ「義務教育費国庫負担率1/2の実現」「マネジメント支援員の配置拡充」「国主導の包括的な人材確保戦略による未配置解消」「学校と教師の業務の３分類の周知と実行」「教育施設・設備等の環境整備」の５本柱を強く要請している。

2　講演

【演題】「日本の副校長・教頭を
　　海外のスクールマネジメントから考える」
　　－全国公立学校教頭会の調査を受けて－
【講師】文部科学省国立教育政策研究所
　　教育政策・評価研究部長
　　藤原　文雄氏

副校長・教頭の本来の専門性は学校全体の業務を適切に割り振る「実務のリーダー」であるとの指摘があった。専門性を高め、未来を拓くためのポイントとして、以下の４点が挙げられた。

・教頭職への移行支援とメンタリング（逃げ場の構築）
・職務遂行のための実務支援（法的・財務的知識の習得と環境整備）
・教育的リーダーシップと巻き込む力（職員のモチベーションを高める企み）
・チーム学校の推進と外部とのつながり（共通目的のもとに力を結集させる）

3　グループ協議での実践共有

・チーム体制の構築
　チーム担任制や時間割の工夫を導入し、教員の孤立を防ぎ学校全体で子供を支える体制づくり。
・地域連携
　地域コーディネーターや学校運営協議会を活用し、業務の分業化や地域資源の教育活動への還元を図る。
・人材育成
　マンパワーが不足する中、若手には得意な仕事を任せて褒める、対話による短いOJTを実施するなど、世代間のギャップを埋める工夫。
・働き方改革
　40分授業の導入による下校時間の繰り上げと研修時間の確保など、教育活動の充実とウェルビーイング向上の両立。

4　成果と今後の課題

藤原氏の指導助言を通し、教頭職のコアは日常的に学校を回す「トラブルシューター」であり、関係者が自律的に問題解決できるよう育てることにこそやりがいがあることが確認された。

今後の課題として、教員不足の中で離職を防ぐためには、具体的な解決策の提示だけでなく、自己開示や共感を示す「情緒的サポート」による相談しやすい環境づくりが不可欠である。また、地域連携においては「学校運営協議会（話合いの場）」と「地域学校協働活動（実働部隊）」の役割を明確に分ける必要がある。

最後に、副校長・教頭自らが業務を工夫して「余白」を創出し、それを教職員のウェルビーイング向上や研修に充てることの重要性が確認された。

今後も全公教のネットワークを活かし、新たな「教頭の在り方」を構築・発信していくことが求められる。



特別Ⅰ分科会

研究課題「時宜に応じた課題」



1　講演

【演題】「副校長・教頭の働きがいを高める
学校マネジメント」
【講師】東北大学大学院教育学研究科・教育学部教授
青木　栄一氏
（1）副校長・教頭の働きがいを高める学校マネジメント～３分類に基づく、業務改善と時間創出
（2）副校長・教頭の働きがいを高める学校マネジメント～３分類に基づく、人を育てる対話力

2　講演の内容

（1）にかかわって
・働きがいを高めるために必要な要素として、３Ｃの視点において、協働性という部分がやはり一番大事である。いかにその先生方の心理的負担を軽減させることができるかどうかが、副校長・教頭にとって大事である。
・生徒指導の対応は、学校（チーム）や組織として対応できるようにシステム化する。そういう部分については、副校長･教頭のリーダーシップが必要になってくるのではないか。
・いろいろな問題に対する対応力やマネジメント力が副校長・教頭としての役割として必要になってくる。心理的負担を軽減するために、例えば職員の状況を把握していく、そのような力も副校長・教頭には必要でないか。
・学校と教師の業務の３分類（「学校以外が担うべき業務」「教師以外が積極的に参画すべき業務」「教師の業務だが負担軽減を促進すべき業務」）の表を学校玄関に掲示して、来校者や地域の方々にも理解してもらうという実践例があった。また、全ての家庭から理解を得るために３分類の文書を発出している地域もあった。３分類のマネジメントを進め、業務改善を行い、時間を創出したい。

（2）にかかわって
・３分類のマネジメントを進め、時間を創出する。時間を創出することで職員との対話の時間が生まれ、対話することで人材育成にもつながる。３分類のマネジメントと対話を重要視する。
・計画年休を取って、少しでも休めるような環境を整えているという学校もあった。先生方が気持ちよく働けるようにするために、その職場内でできることと、職場外でできることを調整する。
・人事に関して、その先生があまり今までやったことのない、または得意ではない業務を意図的にあて、潜在的な能力を引き出し、組織力の底上げをする。
・職場の方同士が敬語で話をする。若い方が少しでも話しやすい雰囲気をつくる。
・授業が変われば子供も変わる。ラーニングピラミッドを黒板に貼って授業改善を図る。

3　まとめ

・業務整理と時間創出について、業務を分類し、副校長・教頭は一人で抱え込まず、職員会議や各委員会などで、なぜこの業務を整理するのかという目的を共有し、組織全体のコンセンサスを得る。捻出した時間を「職員との対話」や「授業研究」「学校づくり」といった本来管理職が注力すべき組織の未来を創る時間へ再配分することが必要である。
・教職員が受け身でなく、自ら考えて動く（エージェンシーを発揮する）組織にするために、主体性を引き出す対話的なアプローチが大切である。指示から「問いかけ」へ、心理的安全性の担保、協働的な対話など、副校長・教頭は理解者・伴走者であることが必要である。
・副校長・教頭が心身ともに健康であることが、学校全体の安定につながる。誰もが健康で持続的に働ける学校にすること、教育の質と子供の幸福を高めるために時間を設計することが、副校長・教頭のウェルビーイングにつながる。



特別Ⅱ分科会

研究課題「開催地の創意を生かした課題」



1　講演

○講演１
【演題】「豊かな心は健やかな体から」
【講師】スポーツ庁政策課教科調査官
　　岩田　悟氏
○講演２
【演題】「地域のスポーツ資源を生かした学校づくり
　　－多様な体験活動を通した共生社会の
　　実現に向けて－」
【講師】北海道オールオリンピアンズGeneralManager
　　鈴木　靖氏

2　講演の内容

講演１にかかわって
・なんとなくではなく「どんな子供を育てたいか」「どんな力を身に付けるか」、学校・地域の実態と合わせた取組が大切である。
・地域との関わりは必要だが、地域や学校での温度差がある場合もある。地域から学校への働きかけがなければ、学校から地域へのアプローチも必要である。
・地域人材を生かした人間関係作りプログラム、小中連携等、児童生徒同士のつながりをつくる。
・地域の特色を生かした産業（漁業、農業など）の取組や姉妹都市との交流、食育（地域の食材）等、専門家を呼んでの講演など考えられる。

講演２にかかわって
・各地域のプロスポーツチーム、地域出身のアスリートの講演による「本物に触れる」体験の必要性。児童・生徒の知的好奇心の向上と、世界を身近に感じ、将来への希望となる。
・雪国でのウインタースポーツの取組には保護者の協力が欠かせない。中学校では部活動指導もあるが、CSを利用した取組など、地域の人材確保も必要である。
・部活動とは別に、少年団やクラブチームの休日や放課後の活動により、翌日の疲労困憊での登校が課題となる場合もある。また、保護者負担の増加やクラブチームでのトラブルを学校が対応する事例も多くある。
・陸上教室や地域のスポーツ選手の講演などの「本物の経験」は、自己肯定感の向上にもつながる。学校に足を運べていない児童・生徒もできるだけ多く参加できる準備が必要である。
・大都市ではプロ球団（選手派遣・施設使用）の利用がある。一方で、農村地域は、地域の方へ指導者をお願いしたり、教育委員会と密接な関係をもったりするなど、学校だけでなく地域全体での取組となる。
・水泳授業やスキー授業などの地域移行とともに教職員の関わり方にも変化。また、「やらない子」の増加も気になるところである。

3　まとめ

・学校の課題を地域と共有する勇気をもち、外部（地域・行政）との連携を副校長・教頭が中心となって行う。自然豊かな学校や都会の学校、学校規模などの違いもあるが、各学校の特色が生かされた、地域に根差した学校づくりが必要である。今ある仕組みを生かし、地域の子供を育てる土台を改めて見つめ直す。
・地域などで違いはあるが、「本物の経験」に勝るものはない。部活動地域移行や水泳学習の民間への移行等、地域や行政と連携し、スポーツ資源を生かした学校づくりのための効果的な取組を模索していく必要性がある。副校長・教頭は外部機関との連携の中心となって学校経営に携わることが求められている。



札幌大会分科会の様子







































札幌大会運営の様子


札幌コンベンションセンター
SAPPORO CONVENTION CENTER


B
C




荷物預かり場
荷物預かり場


第68回 全国公立学校教頭会研究大会
第58回 北海道公立学校教頭会研究大会
札幌大会


受付
1A




107
受付

兵庫大会紹介





来年度の「第69回全国公立学校教頭会研究大会」を令和９年７月29日（木）30日（金）の２日間、兵庫県神戸市で開催いたします。

兵庫県は、近畿地方で最大の面積を誇り、北は日本海、南は瀬戸内海、さらに淡路島を介して太平洋へと続く紀伊水道に面しています。その広大さと多様な風土から「日本の縮図」とも称される、非常に奥深い魅力に溢れた県です。兵庫県は大きく５つの地域（摂津、播磨、但馬、丹波、淡路）に分けられ、それぞれが独自の文化を育んできました。

神戸（摂津）は県庁所在地であり幕末の1868年、神戸港が開港したことで兵庫は国際貿易の玄関口へと変貌を遂げました。居留地を中心に西洋文化が流入し、日本初の映画上映やゴルフ場など「モダン文化」の発信地となり異国情緒あふれる港町として発展してきました。播磨は世界文化遺産・国宝の姫路城があり歴史の重みを感じさせ、現在では数多くの海外からの観光客も訪れるスポットとなっています。但馬は北部の豪雪地帯で城崎温泉や神鍋高原など、四季折々の自然を楽しめます。丹波は黒豆や栗などの特産品で知られ、豊かな農村風景が広がります。淡路は玉ねぎの産地であり、古事記の「国生み神話」の舞台としても知られるリゾート地です。

そのような中、1995年の阪神・淡路大震災により兵庫県は人・街・地域が大きな被害を受けました。しかし、県民の強い絆と努力によって、現在は以前にも増して活気ある街へと復興を遂げることができています。この経験から得た防災の知見を生かし、震災・学校支援チーム「EARTH」を立ち上げ、国内外の災害支援に取り組んでいます。このように先人から受け継いできた兵庫を未来に継承していくためには、現在の様々な課題を乗り越えていかなくてはならない状況です。主な課題として、少子高齢化にともなう人口減少や社会構造の変化、社会を支える人々の構成や価値観の多様化等、子供たちは予測困難な未来に向け、持続可能な社会の担い手として自立していかなければなりません。兵庫大会では大会サブテーマとして「絆を深め、他者と協働して調和のとれた未来を創造する力を育む学校づくり」を掲げています。これからの時代、大人・子供を問わず、よりよい社会を築くためには「協働」や「調和」というものが重要であると考えます。兵庫県の五国それぞれが独自性を保ちながら「協働」し、西洋の文化を柔和に取り入れ「調和」してきた兵庫において、全国の先生方と学び合えることを楽しみにしております。

第69回 全国公立学校教頭会研究大会兵庫大会
実行委員長　石野　誠悟

札幌大会を振り返って

第68回全国公立学校教頭会研究大会札幌大会は、第59回北海道公立学校教頭会研究大会を兼ねて、令和８年７月30日・31日の両日にわたり、全国から多くの会員の皆様をお迎えし、盛大に開催することができました。

本大会はハイブリッド型で開催され、会場参集および視察で約1,600名、オンラインで約2,000名と、あわせて約3,600名もの皆様にご参加いただきました。さらに、記念講演講師ならびにシンポジウム登壇者の皆様のご厚意により、１日目の全体会につきましては参加者以外にもオンライン視聴をご案内することができました。

１日目の記念講演では、作曲家・音楽プロデューサーの蔦谷好位置氏をお招きいたしました。若手アーティストとの関わりから得た「相手をリスペクトし、最高のパフォーマンスを引き出す」姿勢をはじめ、今後直面する生成AIとの向き合い方、そして「どんな子供にも可能性がある」という温かいメッセージなど、私たち副校長・教頭が子供たちや教職員と向き合う上での多くの示唆と力強いエールを頂戴いたしました。

続くシンポジウムでは、コーディネーターの渋谷一典氏による進行のもと、３名のシンポジストからそれぞれの専門性やご経験に基づく貴重な知見をご提示いただきました。文部科学省の立場から「活力ある学校を目指すには、子どもだけでなく教職員にとってもそのような場所でなければならない」と提言された藤原文雄氏、実業家の立場から「学校と企業をマッチングする仕組みづくりへの行政の参画」を求められた阿部夕子氏、そして元夜間中学校校長の立場から「子供の声を聴く大切さ」を訴え、生徒の意見を学校運営協議会に反映させて改善策を協働模索した事例を紹介された工藤真嗣氏。深まりを見せた協議は、「教職員が専門性を発揮できる環境を整え、課題やニーズを仕組みへと昇華させ、地域や企業と役割を分かち合うことこそが、学校経営そのものではないか」という重要な問いかけとともに締めくくられました。

２日目の10の分科会におきましては、提言者による具体的な実践発表や講師による講演に続き、設定された協議の柱に沿ってグループ協議が行われました。副校長・教頭が直面する様々な教育的諸課題について、議論や指導・助言を通じて解決への糸口を得られたばかりでなく、全国に志を同じくする多くの仲間がいることを再確認し、明日への勇気と活力を見出していただけたことと存じます。

本大会で得られた学びや知見が、今後の皆様の各学校・各地区における実践において、少しでもお役に立てば幸いでございます。

全国公立学校教頭会研究大会　札幌大会実行委員長　中川　幸治

会章のいわれ

円は教頭会のまとまり、協力、発展
教は教育の教と教頭の教
8本の線は全国8ブロックを意味し、
中央の段違いのアクセントは
教頭の自覚を促すことを希っている。

Designed by
元茨城県真壁町桜川中学校教頭
塚本　武治 氏

令和８年度
第68回 全国公立学校教頭会研究大会
第59回 北海道公立学校教頭会研究大会
札幌大会集録

令和8年10月20日発行

編集人兼発行人　全国公立学校教頭会会長
札幌大会大会長　大髙　珠恵
札幌大会実行委員長　中川　幸治

発行　全国公立学校教頭会
〒105-0002 東京都港区愛宕1丁目6番7号
TEL 03-3436-4868　FAX 03-5425-2788

印刷所　佐藤印刷株式会社
〒060-0807 北海道札幌市北区北7条西8丁目1番地
TEL 011-726-3345　FAX 011-726-2170